



# 史跡 山中城跡

発掘調査と環境整備事業の概要

2001

三島市教育委員会

山中城跡西ノ丸・西櫓全景

## 1. 山中城跡の概要

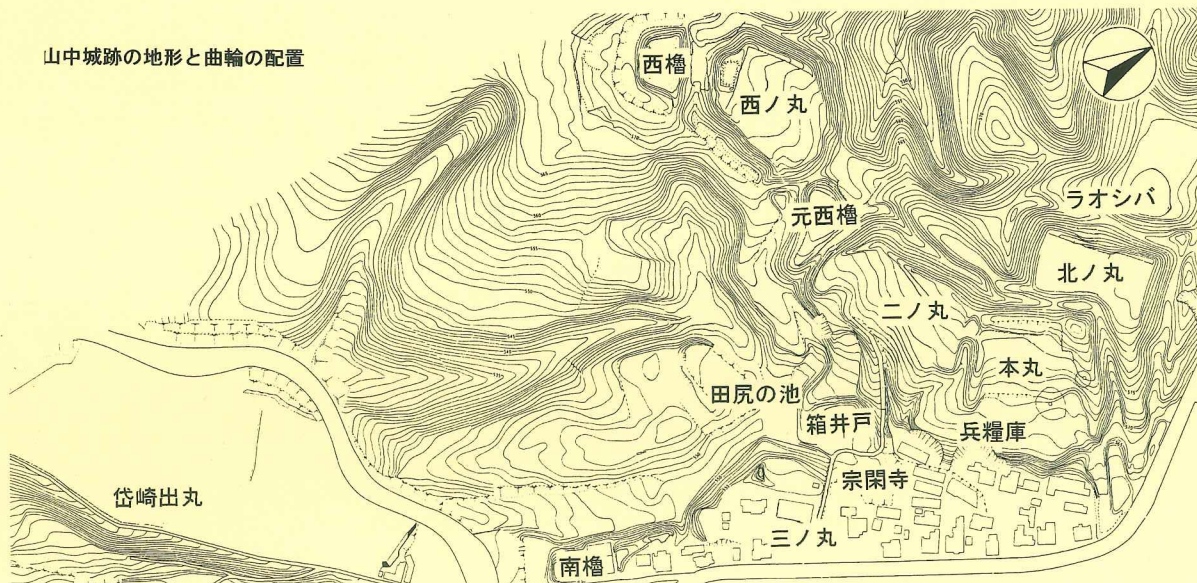
「<sup>しせきやまなかじょうあと</sup>史跡山中城跡」は、三島市街地の東方、静岡県と神奈川県を画するように聳える箱根山の中腹、標高580mに位置する戦国時代末期の城郭です。この山中城は、小田原に本拠を置き、関東地方をその領土とした後北条氏が築城した国境警備の城、いわゆる「<sup>さかいめ</sup>境目の城」でした。したがって領国支配のための城郭に比べ、城下集落を持たない極めて軍事的色彩の強い城と言えます。山中城は、箱根山外輪山から南西方に伸びる丘陵の尾根を利用して築城されており、V字状溪谷をなす2つの河川を天然の堀として利用しています。このため城の南北は急崖をなし、東西方向の尾根には数多くの堀を設けて防備しています。その範囲は、東西1.7km、南北2.6kmに及び、面積は約20万㎡と推定されています。山中城跡からは駿河湾、三島・沼津平野など伊豆地方北部から駿河地方一帯が眺望され、要衝と言えるでしょう。

この山中城の創築年代は明らかではありません。従来、永禄12年(1569)7月2日付「信玄書状写」に武田軍の山中城、<sup>にらやまじょう</sup>葎山城攻撃の事が見えることから、駿河・甲斐・相模の「三国同盟」が崩壊し、軍事的緊張が高まった永禄10年頃、小田原城西方防御の拠点の城として、あるいは小田原と葎山・足柄などの支城群を連携する繋ぎの城として、さらには甲斐・駿河侵攻の兵站基地として築城されたものと考えられており、箱根道を城内に取り込んでいることから、<sup>えいろく</sup>関所的な機能をも有していたと理解されています。

山中城関係文書によれば、<sup>げんき</sup>元亀2年、いわゆる「相甲一和」が成立し、山中城の戦略的意義は薄らぎましたが、<sup>さなだ</sup>真田氏との<sup>なぐるみじょう</sup>名胡桃城をめぐる抗争に端を発し、<sup>とよとみひでよし</sup>豊臣秀吉との確執が表面化、その決定的な対決が現実的課題となった天正15年(1587)頃から、伊豆、相模地域に「<sup>ほうじょうけにんそくさいそくしゅいんじょう</sup>北条家人足催促朱印状」を発給し農民を徴集、山中城の大修築工事を開始した事が知られています。

天正17年には城の南西に位置する<sup>だいさき</sup>岱崎の地を出丸として城内に取り込み、城郭の大規模な増強を図りましたが戦いには間に合わず、天正18年3月29日の開戦となりました。その激しい攻防の様子は<sup>なかむらかずらじ</sup>中村一氏の配下で、「山中城一番乗り」を果たした<sup>わたなべかんべえ</sup>渡辺勘兵衛の「<sup>わたなべすいあんおぼえがき</sup>渡辺水庵覚書」によって詳細を知ることが出来ます。<sup>とよとみひでつぐ</sup>豊臣秀次以下、約3万5千人に達する圧倒的な攻撃力を有する豊臣軍の前に、城主、<sup>まつだやすなが</sup>松田康長、副将、<sup>まみややすとし</sup>間宮康俊はじめ約4千人の山中城守備軍は短時間で壊滅、城は落城し、以後廃城となりました。

山中城跡の地形と曲輪の配置



## 2. 史跡指定と環境整備

山中城跡の史跡指定は、全国的にも極めて早い時期である昭和9年のことです。昭和5年、山中城合戦で戦死した豊臣軍の侍大将<sup>ひとつやなぎなおすえ</sup>柳直末の後裔で、子爵であった<sup>ひとつやなぎさだきち</sup>柳貞吉氏によって、山中城跡の史跡指定が計画され、<sup>やまなかしんでん</sup>山中新田在住の<sup>いちかわちかたろう</sup>市川近太郎氏が山中城跡の現地測量図を作成、「曲輪の保存が良く、後北条氏の縄張りが見られる城」として、城郭の主要部分98,183.00㎡が指定を受けました。

昭和44年、文化庁による史跡調査事業、昭和45年の建設省による「国道一号山中バイパス建設計画案」の提示を契機とし、三島市教育委員会では山中城跡の環境整備事業を決定し、昭和47年より事業に着手しました。以来、22年間にわたって史跡指定地の公有化、発掘調査と環境整備を継続的に実施し、平成5年をもって史跡山中城跡におけるすべて環境整備事業を終了しました。

### ●環境整備事業の経過

昭和9年1月22日	史跡指定 (98,183.00㎡)	昭和55年	第8次発掘調査・第7期環境整備
昭和44年5月	文化庁の史跡調査、環境整備計画の検討	昭和56年4月	山中城跡公園開園(市制施行40周年記念)
昭和46年3月	文化庁調査官の現地視察	昭和56年	第9次発掘調査・第8期環境整備
5月	文化庁へ環境整備基本方針案を提出	昭和57年	第9期環境整備
12月	文化庁・県・市により環境整備事業の協議	昭和58年	第10期環境整備
昭和47年2月	史跡山中城跡調査専門委員会を設置	昭和58年	報告書「史跡山中城跡」一第1分冊刊行
9月	用地測量調査、現況平面図作成(1/100)	昭和59年	第11期環境整備
11月	用地買収事業開始	昭和58年	報告書「史跡山中城跡」一第2分冊刊行
昭和48年7月	第1次発掘調査	昭和60年	北条丸(二の丸)の用地買収
昭和49年	山中城跡環境整備基本構想策定	昭和61年	北ノ丸の用地買収
昭和49年	第2次発掘調査・第1期環境整備	昭和62年	第11次発掘調査
昭和50年	報告書「山中城文献史料集」刊行	昭和63年	第12次発掘調査
昭和50年	第3次発掘調査・第2期環境整備	平成元年	第13次発掘調査・第12期環境整備
昭和51年	第4次発掘調査・第3期環境整備	平成2年	第13期環境整備
昭和52年	第5次発掘調査・第4期環境整備	平成3年	第16次発掘調査・第14期環境整備
昭和53年3月20日	追加指定 (19,673.91㎡)	平成4年	第17次発掘調査・第15期環境整備
昭和53年	第6次発掘調査・第5期環境整備	平成5年	報告書「史跡山中城跡II」刊行
昭和54年	第7次発掘調査・第6期環境整備	平成5年	環境整備事業終了

※第10次、第14次、第15次発掘調査は、史跡の現状変更に伴う調査のため一覧表から割愛した。

### ●史跡山中城跡調査専門委員会 (昭和47年～平成5年)

顧問	八幡一郎	上智大学教授	考古
顧問	宮脇泰一	日本大学教授	建築
委員長	斉藤 宏	三島市文化財保護審議委員長	考古 発掘調査(団長)
委員	山内昭二	三島市文化財保護審議委員	考古 発掘調査(副団長・団長)
委員	高杉洋二郎	日本大学文理学部講師	考古 発掘調査(副団長)
委員	高橋省吾	三島市文化財保護審議委員	近世 文献史料調査
委員	友野 博	三島市文化財保護審議委員	中世 文献史料調査
委員	高島 勝	三島市文化財保護審議委員	植物 植生・気象調査

環境整備事業を進めるにあたっては、あくまで発掘調査の成果の基に遺構の復元を図ることを基本方針とし、次の事項を念頭に置いて整備を進めました。

- (1) 史跡の保護を前提に整備すること。
- (2) 自然を保護し、自然景観を維持すること。
- (3) 史跡と調和のとれた公園利用を図ること。

山中城跡の環境整備は、各曲輪を中心とした復元区域と、本丸周辺の堀・帯曲輪などの現状保存区域、集合広場など便益施設設置区域に区分したうえで、コンクリートなど人工的なものの使用は極力避け、樹木の特性を生かした修景手法<sup>しゅうけい</sup>を駆使した整備を行いました。土塁や堀は遺構面<sup>いこうめん</sup>を風化させず、冬季の霜害から守るため、30cm～1m程の盛土によって被覆した後に張芝を行い、遺構の保存と視覚的な構造理解が両立出来るよう配慮しました。曲輪内の建物跡のうち掘立柱<sup>くわくむら</sup>建物は、柱位置を灌木、建物位置を藤棚の設置によって表示し、礎石建物は、新材による礎石を補って柱位置を示しました。また、復元した橋は、下部構造に疑木を採用し、本体を木製として、本丸西堀、本丸北堀、二ノ丸西堀に架けました。このほか、戦国時代の倉庫建物をイメージした平屋の休憩舎を木製で3箇所<sup>ほったてぼしら</sup>に設置しています。

●環境整備の施工（）内数値は設計委託料

年度	工事	施工範囲	面積(㎡)	金額(円)
49	第1期	西櫓・西木戸口、西櫓堀(5・6号)	850	2,000,000
50	第2期	西櫓堀(4.7.8号)、西木戸口	800	4,000,000 (280,000)
51	第3期	無名曲輪・西の丸全域・西の丸見張台、西櫓堀(3.9号)・西の丸堀(障子堀6区画)・園路の一部	4,600	21,000,000 (1,000,000)
52	第4期	本丸、本丸堀、箱井戸、溜池、北の丸(西半分)、西の丸堀(全域)、西櫓堀(1.2号)、園路の一部	8,000	25,000,000 (1,250,000)
53	第5期	天守櫓、兵糧庫、田尻の池、三の丸堀、南櫓、岱崎出丸御馬場、園路、休憩所設置	12,260	26,700,000 (900,000)
54	第6期	岱崎出丸全域、休憩所設置、園路	16,130	25,480,000 (1,100,000)
55	第7期	西の丸北平坦部、休憩所設置	1,000	5,040,000 (100,000)
56	第8期	岱崎出丸西斜面	2,000	14,085,000 (250,000)
57	第9期	西の丸北斜面伐開、三の丸武将の墓周辺	4,380	5,000,000
58	第10期	西の丸北斜面伐開、発掘調査報告書作成	4,638	5,000,000
59	第11期	西の丸北斜面伐開、発掘調査報告書作成	1,380	3,000,000
63		二ノ丸全域測量・設計委託実施		3,450,000 (3,450,000)
元	第12期	本丸西堀、架橋、二ノ丸曲輪、土塁、櫓台跡	3,246	14,291,250
2	第13期	二ノ丸西堀、曲輪、土塁、元西櫓架橋	3,544	20,600,000
3	第14期	二ノ丸進入路、箱井戸	1,981	16,122,000
4	第15期	北の丸(東半分)、北の丸周辺の測量・伐開	10,670	16,416,140 (2,317,500)
合計			75,479	207,184,390

●用地買収

年度	土地(㎡)	購入費(円)	補償費(円)	合計(円)
47	11,998.64	28,676,000	1,400,000	30,076,000
48	12,715.06	28,600,000	1,400,000	30,000,000
49	12,615.70	43,201,000	331,000	43,532,000
50	9,809.14	34,838,000	—	34,838,000
51	7,565.53	30,000,000	—	30,000,000
53	14,299.86	30,000,000	—	30,000,000
60	5,285.00	28,944,000	3,756,000	32,700,000
61	9,251.57	49,975,000	7,048,000	57,023,000
合計	83,540.50	274,234,000	18,935,000	288,169,000

●環境整備事業経費の合計

項目	金額(円)
用地買収費	288,169,000
発掘調査費	67,175,597
復元整備工事	207,184,390
合計	562,528,987

※公有化率 約90% ※買収総面積107,499.60㎡(指定地内83,540.50㎡・指定地外23,959.10㎡)

### 3. 発掘調査の成果

#### ●縄張

山中城は放射状に分岐した3本の尾根を利用して築城しています。主尾根の中央に本丸を置き、これを中心として、北尾根に北ノ丸、ラオシバ、西尾根に二ノ丸、元西櫓、西ノ丸と曲輪を連ね、南西尾根に三ノ丸、南櫓、岱崎出丸を配置しており、全体としては南西方向に開いたU字状の連郭式城郭としています。その曲輪は、尾根を障子堀と呼ばれる後北条氏独特の手法による堀によって掘り切り、独立性の高いものとなっています。尾根の側縁には横堀と帯郭を配置して、二重の防衛ラインを構築しており、城郭の最先端部には西櫓と呼ぶ角馬出が設置されていて、後北条氏の論理的な最新築城技術を見ることが出来ます。

#### ●建物

山中城の遺構、特に曲輪内に存在が想定される建物は、戦後の開墾と根菜類の栽培に伴う天地返しが一層のかなり深さまで実施されたため、ほとんど確認されていません。建物が検出されたのは、兵糧庫で3間×4間の礎石建物一棟、西櫓で掘立柱建物一棟、元西櫓の礎石建物一棟のわずか3棟です。このほか北ノ丸で搦手門と考えられる掘立柱建物が、平石の階段を伴って検出されています。また、西ノ丸をはじめとして、多様な形態・規模の土坑(穴)が多数検出されましたが、出土遺物も少なく、その機能を推定し得るものはほとんど存在しておりません。一方、曲輪を囲む土塁のコーナー部に、一隅を拡張し櫓台を構築する手法が顕著に見られます。櫓そのものの構造は不明ですが、いずれも虎口を防備する位置に設置してあり、強力な防衛施設であったことが推定されます。

#### ●土塁

山中城の土塁は敵の攻撃が想定される方向を正面に、曲輪の三方を囲むコの字状の配置が基本です。本丸北側、厩にみられる大土塁は基底幅15m、高さ4.5mの大きなもので、通常規模の土塁は高さ1.8m、法面勾配はおおむね58°となっています。堀の掘削土を版築状に積み上げて構築しており、西櫓、本丸の土塁上では一定間隔で、径約30cmの柱穴が検出されました。板塀あるいは柵の存在が推定されます。

#### ●堀

山中城における発掘調査の最も大きな成果は、障子堀と呼ばれる堀の実態が明らかにされたことでしょう。江戸時代の軍学書には「堀障子」の記述が見られ、空堀の底に敵を残し、敵兵の行動を阻害するものと漠然と考えられていましたが、山中城の本丸、西櫓、西ノ丸、出丸などの堀の発掘調査の結果、その形態がはじめて明らかになりました。

障子堀には単列と複列があり、単列の障子堀は西櫓にその典型が見られます。そこでは堀の中に高さ1.8m程の敵を障壁として掘り残し、堀全体を10区画に区分しています。一区画の大きさは、長さ8～9m、幅2m前後で、敵法面の傾斜は概ね55°の急傾斜なものとなっています。仮に堀底へ転落した場合、この敵を乗り越えて脱出することは到底不可能と思われる。堀そのものの深さが9m以上あり、しかも地質がローム層であるため滑りやすく、素手でよじ登ることは困難です。甲冑を身にまとい、刀剣・弓矢を携えた重装備の兵士が落ち込んだ場合、まさに蟻地獄に落ち込んだ蟻のごとき様相を呈したことでしょう。

典型的な複数列の障子堀は、西ノ丸西堀に見られます。堀の中央部に幅の広い敵を設け、この中央敵から両側に向かって直角に、そして交互に配置しています。したがって、障子の棧とはやや趣が異なります。各区画の長さは8～9mで、単列の障子堀とほぼ同様の規模となっています。これら障子堀の一部は、地下水脈を掘り切り偶然に水堀となっていた区画があり、皮革製甲冑部品、建築部材、木製飲食器など通常では残らない貴重な遺物が出土しました。この他、本丸西堀では拡張工事の痕跡が確認されています。

## ●橋

独立した曲輪を連絡するために、堀の一部を掘り残した土橋と、木橋が設置されています。西ノ丸、西櫓には土橋が設けられ、本丸北堀、二ノ丸西堀では確認された柱穴から4本柱の木橋の存在が実証されました。一方、本丸西堀の土橋は西端部が切断されており、拡張に伴い両者複合形態の橋としたようです。また、「渡辺水庵覚書」には「三ノ丸と二ノ丸間に水堀相見へ、堀の上十間余りの欄干橋有之候」とあり、箱井戸と田尻の池を跨いで、長さ18mほどの欄干の付いた橋が存在したことが知られます。

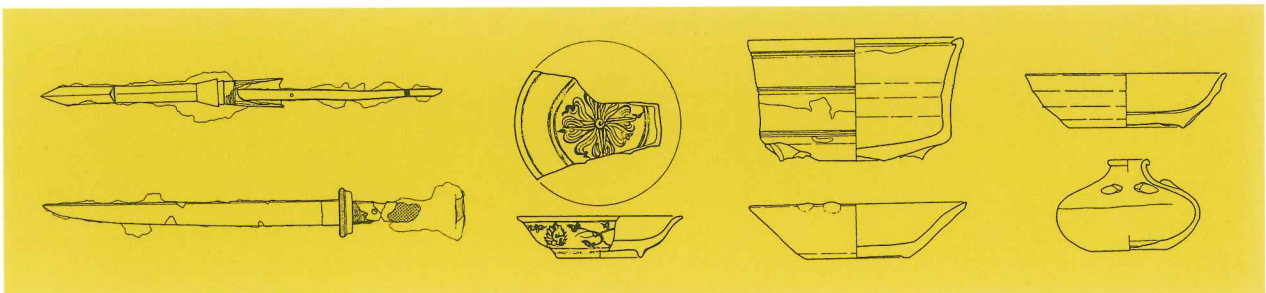
## ●出土遺物

遺物の出土は調査面積に比較して極めて数少ないものです。このことは山中城が地域支配の城とは異なり、国境警備の城であり、臨戦時のみに人員が増強される軍事基地としての性格の強かったことを意味していると思われます。また、これまでの発掘調査地点が戦闘的な位置にある曲輪が中心で、恒常的な居住区域とみられる三ノ丸の調査が進行していないことにも起因するものでしょう。しかし、西ノ丸や兵糧庫では日常生活用品が比較的多く出土しており、居住施設が存在したことが明らかにされました。一方、西櫓、出丸といった地点では武器・武具の出土が顕著で、曲輪の性格の違いを示すものとして注目されます。

出土した陶磁器は、中国産陶磁器、国内産陶磁器があり、国内産では瀬戸・美濃製品のほか初山、志戸呂など静岡県産品の出土が目立ちます。こうした中国産陶磁器、瀬戸・美濃製品、静岡地元窯製品、そしてかわらけによるセットは、後北条氏の城郭出土陶磁器類に一般的な事例で、一つの大きな特徴です。そして、廃城後、東海道山中宿が成立する17世紀中葉までの空白期がみられることから、出土遺物そのものは少ないものの、陶磁器研究には良好な資料と言えるでしょう。

武器・武具の出土もまた多くはありませんが、刀や槍、火縄銃、甲冑など、ほぼ当時の兵士の装備が揃っています。多くの遺物に二次的な焼成が認められ、戦後処理が行われたことが推定されます。兜の前立や草摺など、皮革や和紙を素材とし、漆塗り仕上げとしたものも少なからず認められ、当時の甲冑が極めて軽快な装備であったことが知られます。このほか、西櫓、二ノ丸の土塁上で人頭大の角礫の集石が見つかりました。同様の礫は堀底からの出土も顕著であったため、これらの礫は石礫であったと考えられました。一方、堀底からは多数の鉄砲玉の他、少数ではありますが大筒玉が出土していることから、火縄銃はもとより、大筒（大鉄砲）までも保持されていたことが明らかとなり、こうした新旧の防衛装備が共存し、機能していたことが示されたことは、当時の戦闘システムを考える上でも重要な資料と言えるでしょう。

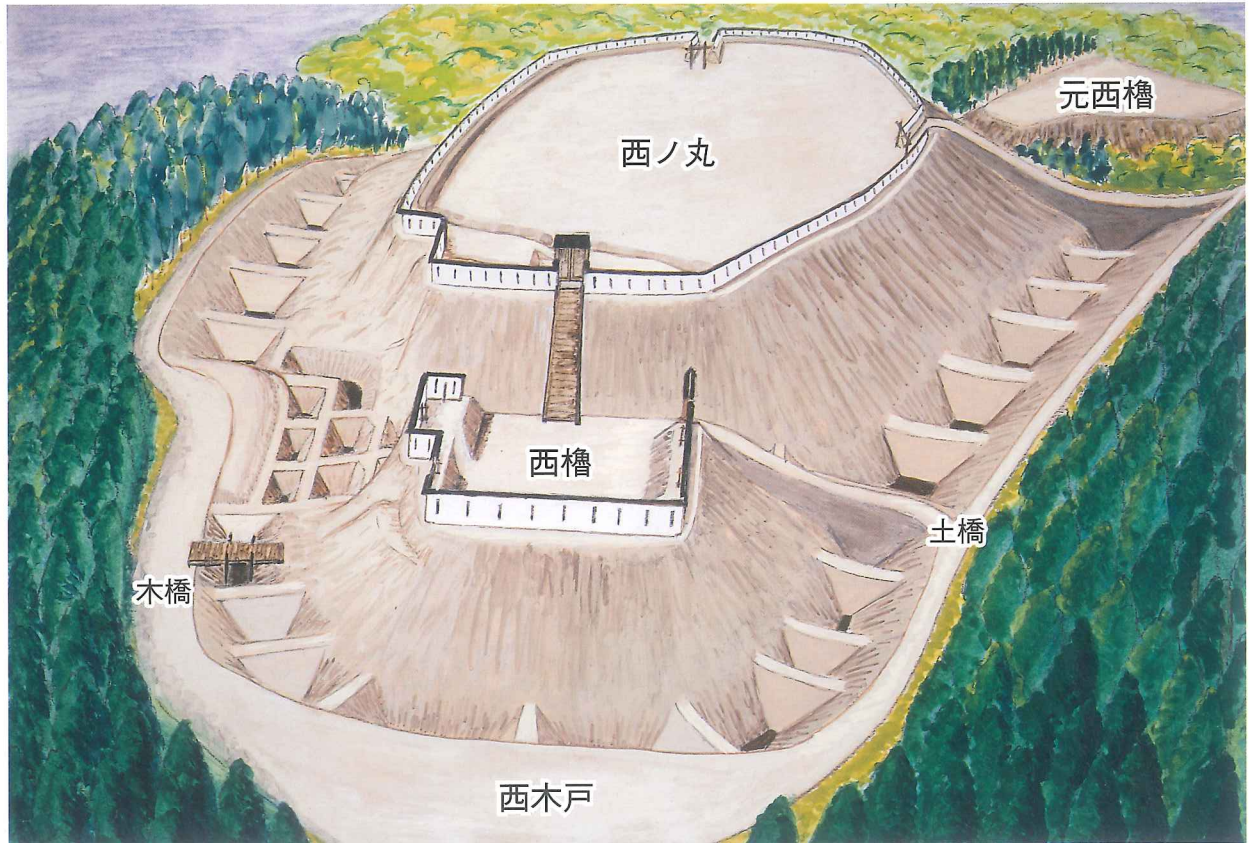
山中城は先にもふれたように、戦中・戦後の開墾により曲輪内部が破壊されていることから、建造物を推定する資料に欠けています。しかし、西ノ丸西堀、二ノ丸西堀では部分的に水堀を形成した区画が存在したことから、柱や貫板、楔など建築部材が少なからず出土し、山中城における建造物の建築技法、用材の選択とその加工技術を知る上で重要な資料となりました。また、小径木を使用した柵の部材も多く、しかもこれを製作した際の削りくずや、手折った小枝なども出土しており、これらは臨戦時におけるあわたしさがうかがえる資料とも言えるでしょう。



山中城跡から出土した武器・陶磁器

●発掘調査の範囲と経過

年度	年次	調査範囲	面積 (㎡)	金額 (円)
48	第1次	西櫓、無名曲輪、溜池、西櫓堀	1,100	3,015,000
49	第2次	西櫓、西ノ丸、西櫓堀、西の丸堀(障子堀)	1,300	4,000,000
50	第3次	西ノ丸見張台、西ノ丸(南半分)、西ノ丸土橋、西櫓堀	1,300	3,973,000
51	第4次	西櫓堀、西ノ丸堀(6区画)、見張台虎口、西ノ丸(北半分)	1,800	6,000,000
52	第5次	西櫓堀、箱井戸、本丸跡、北ノ丸(西半分)、本丸堀	2,000	7,000,000
53	第6次	天守櫓、兵糧庫、田尻ノ池、岱崎出丸御馬場、空堀	1,500	5,300,000
54	第7次	岱崎出丸全域	2,300	6,520,000
55	第8次	西ノ丸北側平坦部	400	960,000
56	第9次	岱崎出丸西側堀	1,000	2,915,000
62	第11次	二ノ丸西堀、曲輪、東堀の一部	2,000	9,000,000
63	第12次	二ノ丸曲輪北堀、東堀(本丸堀)、虎口、橋脚台	1,520	8,231,000
元	第13次	二ノ丸南虎口(進入路)本丸西虎口	1,400	3,939,568
3	第16次	二ノ丸南虎口(進入路・二階門)	500	2,738,169
4	第17次	北ノ丸(東半分)	1,450	3,583,860
合計			19,570	67,175,597



後北条流角馬出(西櫓)

## 4. 山中城跡の管理と活用

### ● 日常の維持管理 (平成13年度決算額)

城域内の芝生、樹木、施設等の維持管理

(1) 人件費	嘱託職員 1名 4月～3月	2,064,000円
	臨時職員 5名 4月～12月	6,982,605円
(2) 委託料	樹木刈込業務委託(地元町内会)	2,000,000円
	トイレ・浄化槽清掃手数料(2ヶ所)	416,614円
(3) その他	被服等消耗品、光熱水費、火災保険料等	290,453円

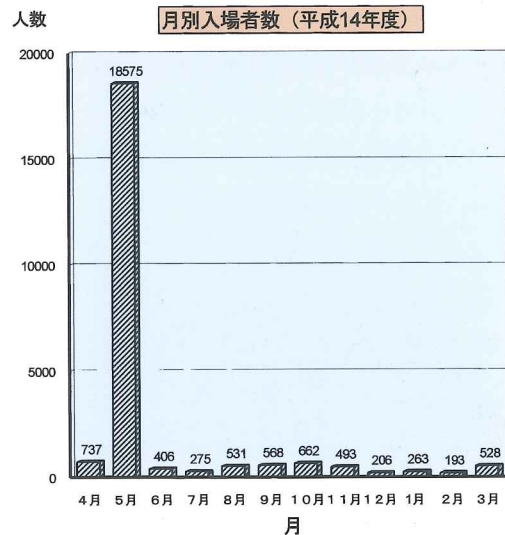
合 計

11,753,672円

### ● 補修整備工事の施工

年度	補修箇所	金額(円)
58	藤棚補修及び安全柵工事	521,000
59	安全柵補修工事	320,000
62	説明板等補修書換(全域) 木橋付替工事(本丸)	1,686,000 1,330,000
元	箱井戸補修工事	2,565,000
2	出丸すり鉢曲輪浸透升修繕 案内板木枠取替	237,000 250,000
3	公民館北側通路排水溝整備工事 標識等取替設置 ゴミ箱設置	988,800 765,300 138,800
4	駐車場水飲み場修繕 説明板補修 案内・標識板設置	319,300 120,000 299,730
5	藤棚補修修繕 標識取替設置(2基) 発掘調査報告書「山中城跡Ⅱ」発刊	1,318,400 499,550 6,176,000
6	岱崎出丸入口階段及び法面損壊管理用道路 補修工事 標識取替設置(5基)	11,021,000 1,349,300
7	通路階段整備工事 西木戸ロトイレ新設工事	19,698,750 11,330,000
8	本丸・北ノ丸架橋整備工事 標識(5基)説明板(8基)取替	15,244,000 5,796,000
9	本丸・岱崎出丸藤棚整備工事 物置・広場トイレ整備工事 標識(4基)説明板(8基)取替	8,977,500 5,145,000 5,644,800
10	田尻の池整備工事 豪雨による災害復旧工事 標識(6基)説明板(8基)取替	7,860,500 1,386,000 6,142,500
11	通路・階段整備工事 説明板(11基)案内板(3基)取替	23,519,000 6,762,000
12	休憩施設等整備工事	23,174,550
13	休憩施設等整備工事 休憩所(1棟)	8,783,250
合計		179,369,030

### ● 山中城跡の利用状況



### ● 商工観光での活用

#### (1) 山中城跡まつり

初 回 昭和57年

21回目 平成14年

日時 5月16日(日) 5月第3日曜日

参集人員 約4,000人

#### (2) 箱根旧街道ウォーク(山中城跡を含む)

日時 9月10日 参集人員 約300人

#### (3) 山中商工組合による売店の経営



## 5. 旧東海道石畳の整備

### ●箱根旧街道石畳の概略

江戸時代初期の箱根越えの坂道は、ひとたび雨が降れば脛<sup>すね</sup>まで泥に潜ってしまうような悪路でした。そのため街道に竹を敷いて通行の便を図りましたが根本的な解決には至らず、延宝8(1680)年に金1,406両余をかけて石敷きの道にしました。これが有名な箱根の石畳です。その後、江戸時代を通じて数回の改修工事を行いました<sup>ぶんきゅう</sup>が、文久元(1861)年に皇女和宮の御東行に備えて行った改修工事が最も有名です。

### ●石畳の発掘調査と整備の概略

三島市は平成6年から9年度まで、町おこしを目的とした箱根旧街道石畳の整備事業を実施しました。対象となったのは笹原・上長坂・浅間平・腰巻・願合寺<sup>さきはら かみながさか せんげんだいら こしまき がんごうじ</sup>の5地区で、全長約2kmにのびます。

整備に先立って行った発掘調査の結果、石畳は一辺が30~70cm・厚さ20~30cm程度の大型の石材を両側に直線的に配置し、その内側にやや小型の石材を隙間なく敷き並べた、幅二間(約3.6m)を基本とする道であることがわかりました。石畳に使用している石材の大部分は、自然に板のように割れた安山岩<sup>あんざんがん</sup>です。こうした石材は周辺の沢筋から運んできたものと推定されています。

また、大部分の石材はローム層の上に直接据えてあり、特別な基礎構造はほとんど作られていませんでした。大型で重量のある石材をしっかりと組み合わせることによって、基礎を作らなくても十分な強度が得られていたのでしょう。

こうした発掘調査の結果と地形的な制約に基づいて、複数の手法によって整備を実施しました。整備の手法には、本来の石畳にできるかぎり手を加えない「現状維持・部分補修<sup>げんじょういじ ぶぶんほしゅう</sup>」、基礎の上に元通り石畳を復元する「下部基礎復元<sup>かぶきそふくげん</sup>」、基礎の上に平成の石畳を造る「下部基礎整備<sup>かぶきそせいび</sup>」等があります。これらの整備で新たに補充した石材は、本来の石畳に使用されていた石材によく似た、神奈川県小田原市根府川の田代山で産出する板状に割れる安山岩<sup>あんざんがん</sup>を使用しました。

以上の整備にかかった総費用は353,396,000円で、このうちの27.1%、95,640,000円を県の補助金でまかないました。



発掘された石畳(腰巻地区)<sup>こしまき</sup>



整備後の石畳



発掘された石畳(願合寺地区)<sup>がんごうじ</sup>

## 6. 発掘された山中宿

山中宿は、東海道の交通維持のため、農家の二・三男を集めて計画的に作られた箱根西坂五ヶ新田の1つで、山中城の落城から約25年ほど後の元和年間（1615～1624）に成立したと考えられています。この宿は、東海道53次に数えられる宿場とは異なり、宿場間が長い場合に設置されるもので、間の宿あるいは立場茶屋と呼ばれ、茶店が主体で構成され、原則として宿泊はさせませんでした。

山中宿は、箱根宿と三島宿のちょうど中程に位置し、急坂であった西坂を往来する旅人の休憩場所として大変繁栄しておりました。その様子は『東海道分間延絵図』に詳しく描かれており、街道の両側に38戸の茶店等が並び、宿の賑わいを伺うことが出来ます。また、弥次さん喜多さんで有名な十返舎一九の「東海道中膝栗毛」にも登場し、この宿にたむろする雲助の生活が生き生きと描かれています。

幕末から明治初期にかけて、伊勢参りなど旅が恒常化すると共に東海道の往来客が急増し、盛況を呈した山中宿でしたが、明治22年（1889）、東海道線の開通を境に徒歩による箱根越えの客が激減しました。このため家業が成り立たず、多くの家が廃業し、宿場経営は終焉を迎えたのです。

三島市教育委員会では、山中地区公民館建設に伴う史跡山中城跡三ノ丸の現状変更に伴い、平成元年、発掘調査を実施しました。その調査で、山中宿の茶店の遺構と考えられる多数の柱穴や穴蔵、井戸、ゴミ穴などが発見されました。そして出土した陶磁器に屋号を記名したものがあり、この発掘調査場所以「水戸屋」と呼ばれる茶店であることが明らかとなりました。出土した陶磁器は、飯茶碗や湯飲み茶碗、そして土瓶や急須がほとんどで、飲食業である茶屋の生活を明らかに示すものでした。その中には19世紀中頃、イギリスとオランダで製造され、長崎の出島を経由して日本に輸入された、貴重な陶磁器も発見されています。いったいどの様な人がこの山中宿に持ち込んだのでしょうか、大きな謎となっています。



出土した陶磁器



『東海道分間延絵図』（1806）東京国立博物館所蔵

（▲ 発掘調査地点）

五街道分間見取延絵図の一つで、江戸幕府の道中奉行所が、18世紀末から19世紀初頭にかけて測量の上描いたものです。道中の寺社や宿場、旧跡、一里塚などが豊かな彩色によって極めて精密に描写されており、往時を知る最良の資料となっています。山中宿には38軒の家屋が描かれ、宗開寺や発掘された石橋なども現状とほぼ一致しています。この絵図に見られる情景が最盛期の山中宿の姿と言えるでしょう。



内浦湾

田方平野

至三島

国道1号線

駐車場

すりばち  
曲輪

一ノ堀

箱根旧街道

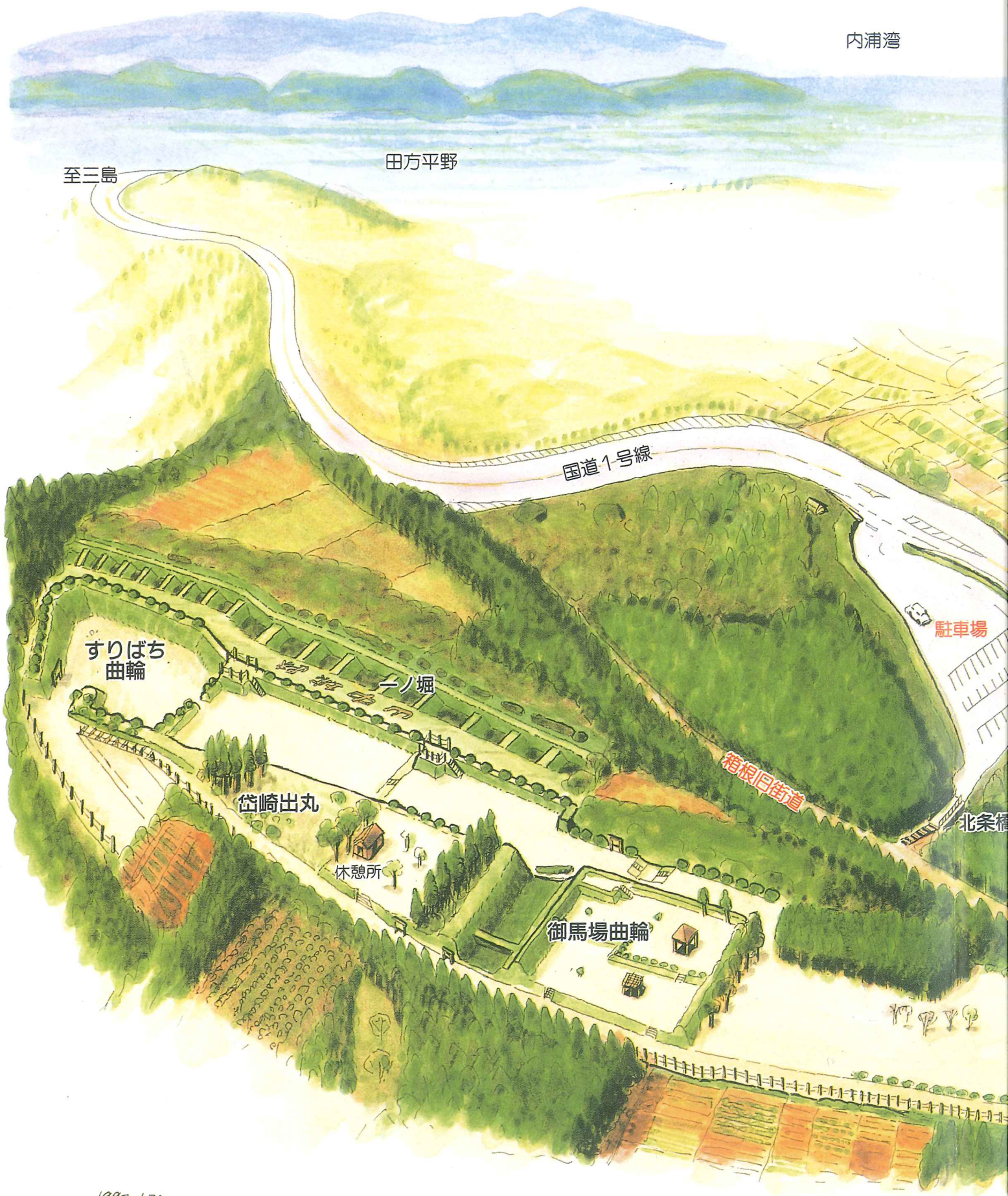
北条橋

岱崎出丸

休憩所

御馬場曲輪

1992.1.30  
Tarabe Toshiyuki



駿河湾

西木戸

帯曲輪  
便所

# 史跡山中城跡



●史跡指定 昭和9年1月22日

●面積 117,856.91㎡



© 2004

# 史跡 山中城跡

発掘調査と環境整備事業の概要

発行年月日

平成13年3月30日 初版発行

平成16年3月30日 第2版発行（一部改訂）

編集・発行

三島市教育委員会

印刷

文光堂印刷株式会社

〒411三島市中央町5番5号

TEL 055-(983)-2672

FAX 055-(972)-3304



だいさき  
岱先出丸と駐車場